

テーマ

「談話レベルに視点をおいた文法問題集作成の試み」

友松悦子（国際学園日本語学校 拓殖大学留学生別科）

宮本 淳（国際学園日本語学校 大和定住促進センター）

和栗雅子（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

はじめに

日本語の予備教育における初級段階を終えた学習者は、よりレベルの高い日本語をめざして中・上級に進むことになる。初級日本語文法では、主として助詞や活用語の変化、一文が一つの単純な機能を果たす文型などを扱うが、中・上級の段階で必要な日本語は、単なることばのキャッチボール的会話や、一文一文の、文としての正確さだけでは不十分で、当然のことながら、さらに複雑な構文、微妙な心情を述べるための表現形式、文脈内のきまりなどが学習の対象となる。

本発表では、中・上級レベルを対象とした文法問題集「日本語テスト問題集－文法編－」（1992年凡人社）作成の背景、過程を振り返り、今後の課題を見いだす指標としたい。

Ⅰ 問題作成の基本的姿勢とその背景について

予備教育というと、まず思い浮かぶのは大学の入学試験であろう。最近では12月に行われる「日本語能力試験1級」を私費留学生のための入学試験代わりにしたり、あるいは能力試験の成績を合否判定の参考にしたりする大学も多いので、学習者や予備教育にたずさわる教師の関心はいきおい能力試験対策ということになる。しかし、より高度な日本語運用力を身につけるためには、バラバラな文法知識を学習者の頭の中に詰め込むようなものではなく、少しく整理した形で中・上級文法をとらえ、また、一文内の文法だけではなく、文のまとまり（談話レベル）におけるきまりにも目を向けさせるような練習が必要である。

さらに、学習者が自分で手持ちの知識を整理しようとし、また自ら思考の流れにのれるような工夫も今日問題集を作るにあたっての大きな課題であろう。

Ⅱ 問題作成の二つの柱

現在の日本語教育には二つの流れがあると思われる。一つは、人と人とのコミュニケーションを成立させるためのもの、つまり、相手が言いたいことを大体把握し、それに応じる能力をつけるための言語教育。これは会話だけでなく読みに関してもありうるもので、筆者が言いたいことは大体どんなことなのかをつかむ力、また、ラジオやテレビなどのメディアによる情報のアウトラインをキャッチする能力を身につけさせるための言語教育である。

もう一つは、情報を分析的、論理的に、時には批判的に理解する力を養うための指導、そして、自分の側の発信すべきことがらを論理的に、効率よく相手に伝えられる力、そうしたいわば知的な力を重視する指導。この二つである。

この問題集を作るにあたっては、後者の方を中心に考えていこうという姿勢がとられている。

さて、中級文法シラバスの基本とは何なのか。初級の文法教育のシラバスはすでにいろいろと世に出ており、機能面からも構造面からも教えるべき項目が整理されているようである。しかし、中級の学習項目を網羅したものとなると特に頼れるものが少ない。それで、一応ここに中・上級の学習事項として二つの柱を立ててみた。一つは、より日本語らしい表現、つまり初級の文型がさらに複雑になったものや、微妙な感情を表現したいときの言い方の学習、もう一つは文と文との有意義なまとまり（談話）におけるゆるやかなきまりを学ぶこと、この二つである。

Ⅲ 談話とは

本稿中の「談話」とは、discourseにあたるもの、つまり、いくつかの文が集まって(特別な場合は一つの文だけの時もあるが)、全体がひとまとまりの言語表現に結束した集合体をいう。この場合、文がただ集まって集合体を成すのではなく、そこに何らかのきまりが働くはずである。そういうきまりが満たされて初めてdiscourseの体裁が保たれるわけだから、そこには「文」のさらに上の構造的単位があると考えられる。それを本稿では「談話」と呼ぶことにする。

Ⅳ 談話構成の要件

池上嘉彦は談話性(テキスト性)を支える構造的な要因として、以下の3点をあげている。(注1)

1 結束性

談話は一般的に「既知の情報」を踏み台にして、その上にあらたに「新出の情報」をつけ加えるという形で展開される。文の集まりが談話性をもつということは、既知のことがらに新しい情報が加わる際に何らかの手段によるつながり(結束性)が感じられるということである。

2 卓立性

効率よく情報を伝達するために、ある部分を卓立させるという手段である。又、ある談話のひとまとまりの中では話し手あるいは書き手の視点に一貫性があるのがふつうである。

3 全体的構造

談話の展開のしかた(一般的に言えば「序論」-「本論」-「結論」のような進めかた)、語彙レベルの統一、文体の一貫性などに関することである。

Ⅴ 作成のプロセス

さて、上記の二つの柱についてテスト問題を作るためには、テストしたいことについてのシラバス(testing syllabus)を作らなければならない。

そのためには、談話のレベルのものについては多くの典型的談話を集め、それを分析し、談話型のようなものに分類すること、文法については中・上級文法シラバスをピックアップし整理してみることが中心的作業になる。

文法シラバスの整理には、日本語教育学会の「日本語教育機関におけるコースデザインの方法とコース運営上の教師集団の役割の分担に関する調査研究」－報告書－（昭和63年）の中の中級表現文型（日本語教育学会編『日本語教育機関におけるコース・デザイン』1991年凡人社の中にも中級表現文型として載っている）および、この報告書の中に採用されていない教科書などを参考にした。また、大学に入学するための作文や、大学で留学生生活をする上で必要な聴解、読解、作文の作業に必要と思われる文型も加えた。その他、実際の日本語能力試験に出題された問題を分析し、出題されている文法項目と文型を参考にして、シラバスを決定した。これを資料として巻末に掲載した。（添付資料A）

一方で文法項目をリストアップするという作業を進めながら、並行して生の談話をできるだけたくさん集めてその中に認められる談話型を見つけるという作業が進められた。「これは談話として典型的なまとまりになっている！」と思われる部分を取り出し、どういう文の運びが見られるかを追っていく、その上でその型を抜き出してみ、同じような型をグループ化するという作業である。集めたものは長短さまざま、談話型もさまざまであった。これも予備分析資料として巻末に掲載した。（添付資料B）

一例をあげてみよう。

①日本人は働きすぎるとよく言われる。②確かに、家族との生活を犠牲にしたり、自分の健康を害してまで働くのは考えものだ。③しかし、日本人生来の勤勉さは、そう簡単には変わらないだろう。④いずれにしても、21世紀に向かう現状を考えれば、そろそろ自分の生き方をみつめ直す時が来ているようだ。

上の文章の論の進め方を見ると、次のようになっている。

①意見の引用→②確かに、一部賛成意見→③しかし、反対意見→④いずれにしても、結論

さて次にどんなことをテスト^するかという点である。前述のような談話集めをすることによって、談話と言えるひとつのまとまりに結束するためにはゆるやかなきまりがあることが確認されたのであるが、そのきまりに気づかせるためのテスト問題の型として次のようなものが考えられた。

- ・ある談話の一部を抜き、その部分に入るべき文を考えさせる。
- ・前の文の流れからして、談話としてどういう終わり方が適切かを考えさせる。(注2)
- ・同様に、談話の終わり方からして、どういう始め方が適切かを考えさせる。
- ・談話の流れを考えさせるために、ひとつの談話をバラバラにしてそれを元のまとまりのある形に並べ変えさせる。
- ・談話の結束性を保つための手段(接続詞、指示語など)を探させる。
- ・視点に一貫性をもたせるための適当な語彙的手段(～てくる、～ていく、～てあげる、～てくれる、感情を表す語彙など)を探させる。
- ・省略文(新聞などによく見られる)の省略部分を完成させる。
- ・ねじれ文に気づかせてこれを回避させる、など。

文法の方面については

- ・単純な初級の文型に対する、より気の利いた言い方を選ばせる。
- ・ある表現形式にのっとして正しい文にするための後文完成問題
- ・同様に前文完成問題
- ・前文と後文の正しいつなぎ方を選ばせる問題
- ・文の分析力をみるために、ある文中のあることばと同じ使い方をする文を選ばせる問題
- ・語彙的な知識をみるためのクローズ式問題、など。

上記の問題型の中から有効的に使えそうなものを選ぶべく検討した結果、文法問題三種類、談話問題三種類が決定した。(添付資料C-1)易から

難へ進めるように、また、文法問題も複文を作るための接続の手段に関するもの、副詞の呼応に関するもの、文脈や複文構造中の後文の制限（マイナス文かプラス文か、意志文か無意志文かなど）に関するもの（注2）などに細かく分けて問題の体裁を整えた。

そうした取捨選択において、どの問題型にも入らないが、testing syllabusとして捨てられないものを総合問題として付け加えることにした。

（添付資料C-2）

原稿の段階で実際に何人かの学生にやってもらい、学習歴一年から一年半の学生で平均60点という結果を得た。

Ⅳ その他

1 手引き、解法、ヒントをつけることについて

言語教育の場では、「教師が教える」「学生が教わる」という図式を崩すことによって活路が見いだされることがよくある。前述のように、中・上級問題集の場合、細切れの知識があるかないかではなく、ある流れにのっかって問題が解けるかどうかを問うものが望ましいと思われる。そのためには、この問題集を使う学習者が、問題につまずいたときすぐに解答をのぞくのではなく、ちょっと立ち止まって考えてみる姿勢をもつことが必要である。

一つの案として、「ヒント集」なるものをつけることにした。（添付資料D）ヒントが必要でない人も、あとでヒントを見ることによって確認することができる。また、冒頭に文法問題、談話問題ともに「手引き」を、さらに談話問題には「解法」をつけることにした。（添付資料E）この「手引き」や「解法」は、問題に当たるときのストラテジーを立てるために役立つであろうし、文法を勉強するときの知識の整理のしかたにも参考になるのではないだろうか。

V 出版以後の反応

さて、現場の教師、養成講座関係者などからの反応は以下の通りである。

- ・問題Ⅲでつまづく学生が意外に多かった。
- ・問題Ⅵは既習一年の学習者でもかなり難しいと感じたようだ。
- ・後ろの資料（特に索引にしたもの）が教える側にとって大変役に立つようだ。（表現形式から分類されていること、中級文法項目を鳥瞰視できることなどから）
- ・学生側も教師側も一文だけでなく「文の集まり」を意識するきっかけになった。
- ・教師養成講座において「中級文法とは何か」を学習するときの教材として使っている。

Ⅵ 今後の課題

以上この問題集作成の動機、背景、そのプロセスなどを振り返ってみたが、まだまだ研究・開発の必要があることを今改めて痛感する。日本語は思いの外談話に配慮をし、談話の拘束性にとらわれる言語ではないだろうか。その意味で談話教育の研究材料は数々あるように思う。今後「談話の文法」に関する基礎的な研究が進めば、中・上級の授業はもっと活性化できると思われる。（注3）とりあえず「談話の型」をさらに充実したものにし、それをシラバス化することが当面の課題であろう。

また、今回の問題集に取り入れられなかった接続詞や敬語などの問題についても今後の宿題である。

さらに、こうした問題を、学習者が談話のどこでつまづくのか、analytical reading の際にどういう思考過程をもつのかという観察（プロトコル分析）に役立てるような使用法も開発できるのではないかと思う。

（注4）

中・上級文法についても課題は多い。表現形式で分類されたものをファンクショナル・シラバスとして再編成してみるとか、新しい形式の文法問題を開拓してみるとかである。

中・上級文法は奥が深く、効率よく教えるための教授法も頼りになるも

のがまだ少ないのではないか。中・上級文法の整理と参考書作りを今後の課題としてさらに研究・開発を続けていきたい。

注1 池上嘉彦『談話の研究と教育Ⅰ』国立国語研究所

注2 93年12月に行われた日本語能力試験（文法の部分）を見ると、わずかではあるがこのように文脈に視点を向けさせようとする問題が出題されている。

注3 友松「一文単位の文法から談話レベルの文法へ」（拓殖大学日本語紀要第4号）でこの点について触れている。

注4 田中望 斎藤里美「日本語教育の理論と実際」（大修館）の中で本問題集の問題を使った口頭内省例が取りあげられている

参考文献

- 1 日本語教育学会編「日本語教育機関におけるコース・デザインの方法とコース運営上の 教師集団の役割の分担に関する調査研究」（1987年3月）
- 2 日本語教育学会編「日本語教育機関におけるコース・デザイン」凡人社（1991年5月）
- 3 国立国語研究所編「副詞の意味と用法」大蔵省印刷局（1991年3月）
- 4 国立国語研究所編「談話の研究と教育Ⅱ」大蔵省印刷局（1989年4月）
- 5 森田良行・松木正恵著「日本語表現文型」アルク（1989年5月）

添付資料A

資

料

2

中級の表現文型リスト

このリストは後記の著作の中級文型リストを参考にしつつ、さらに筆者グループが行った談話の構造の分析結果をもとに選び出した文型も加え、予備教育課程の日本語教育に必要な中級文型は何かについて考え、作成したリストである。

I 接続・修飾・その他の表現

- | | |
|------------------|-----------------|
| (1) 題材・対象・関連 | (14) 推測・推量 |
| (2) 例示・説明・同格 | (15) 可能・不可能 |
| (3) 資格・立場・状態・視点 | (16) 理由・因果関係・根拠 |
| (4) 推移・相関 | (17) 意志・決意 |
| (5) 起点・終点・範囲 | (18) 目的 |
| (6) 対応・割合・基準 | (19) 伝聞・引用 |
| (7) 対比・代替・仮想対比 | (20) 婉曲 |
| (8) 挙例・列挙・枚挙 | (21) 結果・継起 |
| (9) 時・場所・状況 | (22) 仮定条件 |
| (10) 仲介・手段・根拠・基準 | (23) 確定条件 |
| (11) 強調・程度 | (24) 逆接仮定条件 |
| (12) 限定・除外・不適合 | (25) 逆接確定条件 |
| (13) 付加・非限定 | |

II 文末表現

- | | |
|---------------------|------------------|
| (1) 理由・因果関係 | (10) 断定・主張・説明 |
| (2) 義務・当然・必然・必要・勧告 | (11) 伝聞・引用 |
| (3) 禁止・制止・当然の否定・不必要 | (12) 結論・説明・締結 |
| (4) 可能・不可能 | (13) 傾向 |
| (5) 許容・許可・自費 | (14) 推量・推測・推定・予測 |
| (6) 意志・意図・決定 | (15) 比況 |
| (7) 意向強調 | (16) 婉曲 |
| (8) 自然成立 | (17) 希望・願望 |
| (9) 自発・強制 | (18) 提案・勧告・勧誘 |

III 陳述副詞による呼応

IV 談話の構造の構成に関係のある副詞・接続語・「こそあ」

添付資料 B

資

料

1

談話型の予備分析

この問題集を作るために集められた談話を分析し、そこで認められた談話の型を「談話の問題の手引き」の分類に従って分類したものを、以下にあげておく。

(1) ある事柄について例をあげる

事柄 → 分類 → 例

事柄 → 例 (伝聞)

自己疑問 → 否定的事情 → 理由 → 例

状況 → 意見 → 例

状況 → 提言 → 例 → 展望

事柄 → 例 (伝聞) → 感想

一般論 → 例 → 説明

状況 → 対立的状況 → 例

問題提起 → 例 → 説明 → 結論

問題提起 → 例 → 定義

状況 → 例 → 意見

事柄 → 自己疑問 → 答え → 例

(2) 主張・提案などに続いて、理由を述べる

自分の信念 → 理由 → 一般論 → 反論

自己疑問 → 否定的事情 → 理由 → 例

提案 → 説明 → 理由

否定的状況① → 理由 → 否定的状況② → 肯定的状況

他人の発言 → 反論 → 理由

過去の状況 → 変化 → 理由

一般論 → 対立的事情 → 結論 → 理由

問題提起 → 理由 → 結論

意見 → 理由

主張 → 理由

問題提起 → 反論 → 理由 → 主張

(3) 反論を述べる

(4) ある事柄や状況について、まず自己疑問を投げかけ、それに対して自分なりの答えを述べたり、否定的意見を述べたりする

(5) ある事柄や状況、提示された話題や問題について、(1)(2)(3)(4)などのように話を進めたあと、最後に、結論、主張、意見、感想などで締めくくる

添付資料 C-1

問題Ⅰ 次の文の_____にはどれを入れたらよいか。1・2・3・4から最も適当なものを一つ選んで○で囲みなさい。(4×6=24)

(1) 「この仕事は5月の末までに仕上げましょう。」とは_____、本当にできるかどうか非常に心配だ。

- | | |
|----------|-----------|
| 1 言ったものの | 2 言ったところか |
| 3 言ったものを | 4 言ったところが |

(3) 外食が多いと、とかく野菜が_____。

- | | |
|--------------|------------|
| 1 足りなくなるようだ | 2 足りるようだ |
| 3 足りないにちがいない | 4 足りなくならない |

(5) 林さんは京都に5年も住んでいるにしては、京都のことを_____。

- | | |
|------------|------------|
| 1 知っているようだ | 2 知っていればよい |
| 3 知らないようだ | 4 知らざるを得ない |

問題Ⅱ 次の文の_____の部分₁を別の言い方にした場合、最も近いものはどれか。1・2・3・4から一つ選んで○で囲みなさい。(5×3=15)

(1) 大金持ちは別でしょうが、一千万円という大金は、ふつうのサラリーマンにはとても出せるお金ではありませんよ。

- 1 大金持ちならいざ知らず
- 2 大金持ちなら知るまいが
- 3 大金持ちはまずもって
- 4 大金持ちはもちろん

問題Ⅲ _____の部分の意味が、はじめの文の_____の部分の意味と同じ場合には○、違う場合には×を()の中に書きなさい。(5×3=15)

(1) あの人には前にニューヨークでお目にかかっているので初対面ではありません。

- () あの方には毎週一回必ずお目にかかっているのに、このところ忙しくてごぶさたしています。
- () あなたには5～6年前に一度お目にかかっているような気がします……
- () 父は今応接間で校長先生にお目にかかっているところです。

問題Ⅳ 次の談話の()にはどれが入るか。1・2・3・4から最も適当なものを一つ選んで○で囲みなさい。(5×3=15)

- (1) 空を飛ぶことは長い間人類の夢だった。人は鳥や虫が飛ぶ姿を見るにつけ、()とっていたに違いない。
- 1 やはり自分で空を飛ぶことはできないだろう
 - 2 何とかして自分も空を飛びたい
 - 3 ついに自分も空を飛んだ
 - 4 まるで自分で空を飛んでいるようだ

問題Ⅴ ()の中の文または文の一部は、次の(a)(b)(c)……のどの位置に入るか。一つ選んで記号を○で囲みなさい。(5×3=15)

- (1) (a)大学卒業の日を迎え、学生生活もあといく日と数えられるまでになった。
(b)平日に映画を見たり、一日中、図書館でなんとなく過ごしていたりできなくなることが悲しい。(c)「まだ学生でいたい」と思う心もないではない。(d)20年近く学校に通っていた。(e)そろそろ環境をすべて変える時が来たようだ。
(f)

[でも「もういい」とも思っている。]

〈「スタッフから」1992年3月7日付「毎日新聞」より〉

問題Ⅵ 次の文または文の一部を、まとまりのある談話になるように並べかえて、()の中に記号を書きなさい。(8×2=16)

- (2) a 走る、という中身をもう少し分解すると、まずエンジンの中でガソリンを燃やす。
b たとえば、自動車はガソリンで走る。
c この一連の運動の中で「ガソリンが燃えて熱を出す」という部分が「熱学」で、「このエネルギーで車輪が動く」という部分が「力学」である。
d この二つの中間にあつて、両者をつなぐところにある学問が「熱力学」である。
e 「熱力学」というのは、どんな学問だろうか。
f この熱のエネルギーで空気をふくらませ、そのときのふくらむ力でピストンを持ち上げ、ピストンの動きが自動車の車輪に伝えられ、車は走る。

〈糸川英夫「モーツァルトと量子力学」PHP研究所より〉

() → b → () → () → () → ()

添付資料 C-2

総合問題 V

次の文の () にはどれが入るか。1・2・3・4 から最も適当なものを一つ選んで○で囲みなさい。(5×10=50)

われわれの日常生活においては、あることを学ばなければ、快適な生活を続ける上で問題となるような場合が、しばしばある。(①), 就職し、親元から離れてひとりで住むことになったとしよう。もし彼(彼女)がそのときまでひとりで料理を作った経験がなかったとしたら(②)。毎日外で食事をするのは経済的に無理だし、またそれは体にもよくない。(③), 何とか栄養のバランスがとれる食事を自分で作ることができるようになる必要がある。

(④), 学生が卒業論文のためにアンケート調査をした場合を考えてもよい。「機械に弱く、数学は苦手」だとしても、何とかコンピュータの操作を覚え、眼前のデータを分析して、論文を仕上げなければならない。あげていけばきりが無いほど、日常生活では、(⑤) 状況にしばしば出会う。

(⑥), ここでは、人は、まわりの人びとから援助やアドバイスを適宜ひき出しながら、たいいていの場合、その初心を貫き、必要な知識や技能を(⑦)。

先ほどの料理の仕方を学ぶ場合を例にとってみよう。彼(彼女)は、はじめのうちは、毎回、親に電話をかけて作り方を聞くかもしれない。料理の本を買いこんできて、簡単にできそうなものから作ってみること(⑧) するかもしれない。こうして自分ひとりでできる料理のレパートリーをすこしずつ増やしていくであろう。

コンピュータの例の場合も同様である。コンピュータの操作の得意な友人を見つけ、その助言や援助を受けながら、ねばり強い努力のもとに、当面の分析に必要な(⑨) を(⑩)。

(稲垣佳世子・波多野龍余夫「人はいかに学ぶか」中央公論社より)

- ① 1 もし 2 たとえ 3 たとえば 4 もしかしたら
- ② 1 どうだろう 2 どうにもならない
3 なにもできない 4 どうしようか
- ③ 1 となれば 2 となるから 3 といえは 4 とするから
- ④ 1 だけど 2 あるいは 3 もしくは 4 では
- ⑤ 1 その 2 あのような 3 あんな 4 このような
- ⑥ 1 注目するのは 2 注目しなきゃならないことは
3 注目すべきことは 4 注目したことは
- ⑦ 1 習得してしまう 2 習得してしまうだろう
3 習得してしまうのだ 4 習得してしまうことである
- ⑧ 1 も 2 は 3 を 4 でも
- ⑨ 1 仕事 2 コンピュータの操作
3 データ 4 数学
- ⑩ 1 習得することであろう 2 習得するのが好ましい
3 習得すべきである 4 習得したほうがよい

第 1 課

問題 I

- (1) 「自動車は機械製品であるが、それと同時に」という意味のものを探す。
- (2) 後に、「変化する」や「種類がいろいろある」などの文が続くことばはどれか。
- (3) 「こそ」は相手のことや、気持ちなどについて思いやりをもって想像して言う場合に使うことば。後には「～でしょう」などのことばが続く。
- (4) 「どうも」は持っている情報をもとに推測をするときに使うことば。
- (5) 「～することは～したが、……」……には「～したが十分ではない」ことを表す文が続く。
- (6) 自分の気持ちとは反対に、まわりの様子からみて帰ることはできない。能力ではなく「心理的、社会的な理由からできない」を表すことばはどれか。

問題 II

- (1) 場所を表す「で」。あらたまった文に使われるときはどれか。
- (2) 不満、非難などの気持ちをもって話題としてとりあげるときに使うものはどれか。
- (3) 結果としてそういうことになってしまい、責任を認識しているときの表現。

問題 III

- (1) はじめの文は尊敬か、自発か、受け身か。
- (2) なにか軽く例をあげて提案するときの「でも」。
- (3) 「今日中に仕上げなさい」と課長に言われた、と考えればよい。

問題 IV

- (1) この場合「夢」とは大きい希望のこと。まず大前提を述べ、その後、具体的に夢の内容を述べている。
- (3) 「しかも」は前の文の上にさらに強める内容のことを加える場合に使うことば。
- (3) 「まして」は前の文の内容にさらに極端な例をつけ加える場合に使うことば。(「談話の問題の解法」参照)

問題 V

- (1) 「それが実現してみると、～になった」と自然に続くためには、(d) では間に挿入が入って読みにくい文になる。
- (2) (d) 以下の「この400年という長い年月」は、(c) 以下の「4世紀の年月」の言い換えとして、直後の方が自然である。また、[] 内の「それを」は、「長い年月」と「たくさんの人々の研究」の両方を含むと考える。
- (3) 「A。それで、B。」は、BがAの問題に対する対策であることを認めるときに使う接続詞。

問題 VI

- (1) c の「でも」以下は、何に対して満足できないと言っているのか。また、ガイドブックなどの限界を越えるものは何か。
- (2) この談話は「Aというのは何だろうか」で、まず疑問を出して、最後に「～がAである」でそれに対する回答を締めくくる形式になっている。

添付資料 E

談話の問題の解法

[問題 V の例]

{ } 中の文または文の一部は、次の(a)(b)(c)……のどの位置に入るか。
一つ選んで記号を○で囲みなさい。

(a) リスクは便益とのかねあいでは考えなければならない。(b) 困ったことには、便益をもたらす可能性が大きいものほど、隠れたリスクも大きい。

(c) その中でも人間が作り出した94番元素のプルトニウムほど、この両側面がきわだったものはない。(d) そこに原子力時代の夢もあり、悲哀もある。

(e) (答え：c)

〔現代技術は、多かれ少なかれこの善と悪の両側面を持っている〕

〈武部俊一「リスクとつきあう」『科学朝日』1991年10月号より〉

まず、本文を通して読んでみます。そのときに文と文がスムーズにつながらない箇所がどこか見当をつけます。次に、{ } 中の文をよく読み、前述の〔談話としてのまとまりを維持する手段〕のどれかに当たるものがないか探します。この場合、ヒントとなるべきものは、〈……この善と悪の両側面……〉の指示語〈この〉と本文の〈便益とリスク〉の置き換え語としての〈善と悪〉です。そこでこの文を本文の見当をつけた箇所に入れて全体を読んでみます。さらに、〈その中〉や〈そこに〉などがそれぞれ何を指すのか確認します。このように、指示語や置き換え語は先行する文との結びつきを示しているのですから(指示語の指すものは、後の文にあることもあります)、これらの点に注目すれば、文の流れが容易につかめるでしょう。(前述の①と②)

An Attempt at Japanese
Grammar Tests and Practice
in View of Discourse
Structures

TOMOMATSU, Etsuko
MIYAMOTO, Jun
WAKURI, Masako

One of the objectives of the Japanese preliminary education is to prepare learners for studies in universities and colleges, especially in their skills in reading and writing. Therefore, learners in intermediate or advanced courses will be required to get used to a logical and comprehensive grasp of various language material, as well as to learn more complicated structures, more affective expressions and so on.

With this in mind, we attempted to prepare a book of grammar practice in which learners can check their readiness for future studies in academic institutions. This Japanese Grammar Tests and Practice characteristically aims to provide learners with a variety of grammar practice in discourse structures, where they will learn various means of maintaining cohesion in discourse and be able to acquire a higher level of reading and writing abilities.

We gathered about 150 pieces of discourse from newspapers, magazines, books, and so on, and analyzed them in terms of logical development in typical Japanese discourse structures. Based on this analysis, we tentatively classified them into five larger groups, each containing examples of different